

命理・遁甲による幼小児の自己改革の実例

現代の武田式奇門遁甲は、各人の命運の良化・造命開運に向けて命理學と奇門遁甲を一体的に運用するものです。したがって、各人の原命・大運・流年流月での五行十干の関わり合い（≡生剋扶抑）を見極めると共に、遁甲活用の方法をよく理會した上で実践することが大切です。この事に通曉していなければ、命理・奇門遁甲を誤解し、疑問を抱くこととなります。具体的には次のような質問が、私に寄せられております。

- (a) 「造命開運」、「創命」とか安直に云われますが、そもそも人の命運は良化・変革など出来るものでしょうか？ また、どこをどの様に観れば人の命運が変わったと判断識別できるのでしょうか？
- (b) 確りした目的意識を持たない者が遁甲活用しても一向に差し支えないのではないか？ すなわち、遁甲活用は目的意識とは全く無関係であると思うのですが・・・？
- (c) 幼小児期の子供が母親或いは両親に付き添われて遁甲を実践して、どうしてもその子供だけに遁甲効果が出るのか全く不可解・魔訶不思議です。
- (d) 天盤庚・地盤も庚とする「戦格」は、凶格中強烈な凶、破壊作用も強く、悲惨、流血残酷などの象意があるのに、武田式奇門遁甲では当然の如く、使用されています。奇門遁甲の玄義に照らし全くの誤用であり、信頼できない遁甲方式ではないでしょうか？

以上、これらの誤解や疑問に一つひとつ尤もらしく回答するよりも、むしろ確たる事実を提示すれば遙かに説得力があると思われましたので、次に幼小児に遁甲活用した事例を取り上げることになります。

現在、私の「八字命理學講座」を受講中の藤乃初月講師アシスタントから、息子の実審命造を提供してもらいました。≡（同アシスタントは、一九八七年から長年にわたり武田命理學・奇門遁甲・命理學漢方・家相などを学んでいましたが、一線は退き、現在は、幼児教育の日本モンテッソーリ協会（学会）の学会員です。）。

この命理・遁甲の活用は、当時僅か五才の二男の命運良化を目的に、実に二十年以上の長きにわたり、継続実践されたことに着目して下さい。

皆様、こんにちは！講師アシスタントを務めさせて頂いております藤乃初月です。よろしくお願いたします。

さて、芸術家的命理家であらうしやうた故武田考玄先生をご存じない方々へ、幼少時の自己改革をした我が家の息子の例が分かりやすいので、実命例としてご紹介させていただきます。

本命、令和二年現在、三七才。某企業体の研究室で、海外勤務をこなす研究員として仕事を任されておりましたが、一年前に帰国し、今は横浜市在住。国際結婚し二児の父親となっております。

命理学や奇門遁甲など、良く分からないのは当然のことです、大変難解な学問学術でした。それゆえ、私自身の勉強が大変忙しく、没頭していたため子供の学習については、実質的放任主義となり、その点、悪い母親ではありませんが、私が勉強していると二人の息子たちは、おもちゃや本を持ってきて私の周りで遊んでいました。結果的に、母親のやっていたうしろ姿？の影響かどうかは分かりませんが、二人とも職業が企業で研究室に勤務しております。遁甲したら棚ぼた式に運命が変わるといふことはないですが、幼い時の家族の環境が大いに影響していることは否めません。

この事例は、二男の命造ですが、まだ幼小児の段階では、当然のことながら、奇門遁甲（大気造命）で目的地への移動には、両親或いは母親が付き添って行いました。

しかし、遁甲（大気造命）をする場合、確りした目的意識をもって沈思黙考すると共にメモを取ることが大切です。

①現地でもメモを取る。
これはまだ出来なかったもので、親が遁甲の場所でいろいろ語りかけ、本人に考えさせ答えさせる。帰宅後は、それを実行する。

遁甲の報告書は大人と同じように出さないといけないとのことでしたので、五才から文字を遊びの中で覚え、ご指導いただいていた命理家に「遁甲報告書」を提出するという、エネルギーの価値転換を行っておりました。年齢を重ねつつ段階を追って、自分が遁甲中、メモを取り、手から脳に伝達・働きかけをすることで、造命開運に作用するエネルギーの価値転換となるのです。

話はそれますが、振り返れば併せて当時通っていた新居浜市の愛光幼稚園が、モンテッソーリ教育の「日常生活・感覚・数・言語・文化」、コスミックの理會を深める教育を行っていたことで、まだ国語力が無いとはいえ、文字を覚えられ、簡単な文章を書けることが出来たと拝察します。

日本モンテッソーリ協会（学会）の前理事、野原由利子教授（東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学、名古屋芸術大学名誉教授）が、「モンテッソーリ教育を受けた子供たちの追跡調査」で当人を面談する機会があり「幼稚園でどのようなモンテッソーリ教具を使ったか。」という調査中、二男に思い出してもらい、分析していただきました。「数」より「言語」の教具を多く使っていたことが分かりましたが、息子の記憶によりますと、園児たちには「数」の教具が人気で、それを使用できるまでずっと待ち時間中は残っていた「言語」の教具でお仕事（教具を使うこと）していたとのこと。これも教授の分析が無ければ進路を誤ったかと思っていたので良い機会を与えていただけたと感謝してい

ます。といえますのは、高校二年の折、学校の適性検査で「文系タイプ」と診断され、すでに「理系」を選択していたため家族一同、進路を誤ったとガツカリしていたのですが、幼児期、何を脳に伝達したかで将来に大きく影響することもあります。

②「遁甲に出会った経緯」については、

日本命理学会誌『天地人』（第三二号）の「吾が息子の自己変革」で次の如く述べています。

「・・・命理・奇門遁甲を学ばれた加藤先生を通して、武田先生の奇門遁甲を紹介されても、中国から日本には偽物しか伝来していないと思ひ込んでいたため、最初はそっけなくお断り申し上げました。しかし、余り御熱心にお勧め下さるのと、実はその当時、私には四才になる次男（昭和五十七年七月生）が居たのですが、当時の四柱推命によれば一四才位までに命運が尽きることを知り、深い悲しみにくれながらも、誰にも相談できずに悩んでいた矢先でもありました。息子の神性を引き出して昇華させてやれる方法があるならと思う親心が、奇門遁甲学に委ねてみようかと踏み出した第一歩となり、武田先生の奇門遁甲に出逢うきっかけとなったのです。」

なお、当時の命理学による解命は省かせていただき、まことに僭越ながら、後藤先生による現在の八字命理の看法により解命し直しました。より正確な解命を試みるため何卒ご了承ください。あくまで故武田先生の理論がベースです。

男命 昭和五十七年（一九八二年）七月二十七日午前八時四十六分

愛媛県新居浜市生

壬戌（辛 戊）	大運	四才戊申	四四才壬子
丁未（丁 己）		一四才己酉	五四才癸丑
辛亥（壬 壬）		二四才庚戌	六四才甲寅
壬辰（乙 戊）		三四才辛亥	七四才乙卯

命格：偏印格
用神：やむなく己
喜神：土金
忌神：水木火
調候：壬

解命

辛日干にして未月土旺生まれの「偏印格」の命です。立運は三才一ヶ月約四才となります。辛金は軟弱で「畏生之暈」||「土多金埋」を嫌うのに、地支には当権する戌・未・辰の土性支が揃い、土が旺強太過している。このため、天干に透出する陽干甲木でもって疏土開墾する必要がありますが、残念ながら

命中には一点の甲木も見られない。さらに、地支には土を洩らして弱化すると同時に、日干の有力な根ともなる申酉金もないのです。土多金埋を防ぐとともに壬水への洩身（金水傷官⇨金白水清）の両用を果たすため、陽干の庚を用神に取りたいものの命中になく、かたや戌中の軟弱で無情無力な辛では何の役にも立ちません。これゆえ用神はやむなく未中の卑湿の己土と取り、一応、喜神は土金（余りに有力な土は金埋の憂いがあります）、忌神は水木火と取ります。調候壬水も太過気味で、特に年干には壬水が透出し、戌・未土は湿土化して生金するに有情有力となります。さらに時干壬水は、日支亥水に通根して洩身するに一層強力になります。

辛金は壬癸の洩洗を喜ぶとはいえ、やや食傷太過でもあります。また、月干丁火は休令とは言え、年支戌中に水源辛がある年干壬水から剋制され、攻身する力を大幅に削がれます。日干辛金は甚だしい弱とはいえず、死令の壬水への洩身に耐えられか否かの際どころです。辛金には「陰干弱きを恐れず」という特性がありますが、陽干庚金の幫助が欲しい組織構造であります。

次いで立運前の流年を観ていきますと、一才癸亥、二才甲子年、三才乙丑年と、特に水を忌む流年が続いた後、四才丙寅年誕生月から第一運に交入します。

大運を観ますと、

第一運戊申では、辛金は大運旺令の申金に通根、戌土は原命の戌・未・辰土に通根するのに加えて、天干二壬により湿土化して生金するため、日干辛金は強となつて、喜神水木、忌神は土金、火は生土の忌もあるため閑神と取ります。旺令の大運申支に通根する日干辛金であり、埋金となる心配がなくなります。

原命大運での最大の病源は土が旺強太過し、さらに土生金させない甲木の疏土開墾の作用働かないことです。命運のまま流されれば、土太過と辛金が嫌う土多の病（「病薬」といわれるところの病）、木不及の病、「金白水清」の壬癸の洩洗を妨げる病が流年流月において具現・事象化することになります。

乳幼児期から自家中毒、原因不明の微熱、鼻炎アレルギー、自然陽転など心身の健康に恵まれなかった本命の命運は、次の如き命理・遁甲の活用、漢方や食養生などによって創り直されたのです。

「大運現行戊申の10才壬申年（一九九二年）。大運干に戌土透出するも金旺ゆえ埋金の憂いはなし。病源は、辛金の喘息発作。土太過の消化器、皮膚、鼻。壬水の腎系、泌尿器系。年月柱、忌神多く遺伝子によるものと思われる。

立運前の3才丙寅年庚寅月、溶連菌症。辛卯月、マイコプラズマ肺炎以降、喘息へと悪化の一途をたどってまいりましたが、丁卯年5才庚戌月より、御指導のもと、遁甲開始（マイコプラズマ肺炎は、幼年期、三才十才、特に、四才、十才頃に多い。免疫性がなく再発することもある。大人にうつることもあるが、普通の肺炎ほど危険は少ない。庚金なきゆえ）。

初回の遁甲日時盤は次の通りですが、以来本年（一九九二年時点、十才）で

五年目、遁甲を継続して使用中です。ぐんと命運の良化の兆しが見え始め、健康面は無論のこと、性情や行動面、容貌に至るまで変化し、周りの者たちが大変驚いているのが、現実でございます。

（藤乃補注：当時は、五行の調和を考慮し、事象を確認したうえで、甲丙・甲甲の木火を使用する遁甲を実施したこともあり。庚庚・庚辛・己庚を基本的な大気造命とし、要は喜神が強化されるか、忌神が強化されるかで事象も変わって来ました。漢方薬は身体の気の巡りの滞ったところをほぐす作用があります。そのため命理学漢方の『金匱要略』と『傷寒論』の概略を学びました。）

昭 62・10・13 丁卯年 庚戌月 北西

日	盤
芮 雀 庚	庚
9	
開	庚

(陰 8 局 乙未)

時	盤
任 天 庚	庚
2	
生	庚

(陰 8 局 辛巳)

遁甲実施の前日よりひどい呼吸困難。今迄の中で一番きつい喘息の発作に、親子共ども動揺致しましたが、処置法を賜わりまして、丸一昼夜続けました。

翌日乙未日の辛巳刻には、ケロリとして元気よく、母も付き添い父が運転する自動車に乗って自宅から出発しました。瞑眩という、初めての出来事に驚いてしまいました。今でも鮮烈な印象として残っています。以降、明朗活発な子供らしさが始め、食欲も増し、だんだんと風邪を引き難くなりました。喘息の発作も一切出ておりません。漢方薬も幼児であった為、なかなか飲まないのをよく言ってきかせて現在も服用中です。日干強化の為の遁甲、4庚を主に実施致しまして、体質改善は、漢方薬の小柴胡湯、半夏厚朴湯。その時々証に合わせて処方をお願いいただき、水もアルカリ・イオン水の飲用、酸性水は風呂に使用、遠赤サウナでの入浴で老廃物を汗で出すよう心掛けました。食生活もカルシウムとビタミンの摂取を意識した結果、丸五年で次の点に変化が始められております。

腎虚の夜尿症の減少、木の神経過敏、めそめそとして「どうせ、僕なんか」という口癖と情緒不安が去り、はきはきと自分の意見を述べるといふ点で、幼稚園、小学校代表として挨拶ができるまでになりました。金白水清の食傷の喜の事象として、学業・芸術・運動面での才能発揮。遁甲前は、ポツチャリ丸顔のずんぐりした体型（土の容貌）が、顔も面長、体付きもスリムに変化し、見違えるようになってしまい、本当に不思議です。今後も、遁甲を続けることによつて、未病体を既病体迄、悪化させない様、努力致したく存じます。」（以上抜粋引用終わり）

藤乃追記：

我が家の場合、巷の「奇門遁甲で現地にてゆっくりお茶を飲んで優雅に帰っ

てくる」という実施方法ではなかったのですが、世の中にはそのような主義の方もみえるそうです。自己改革は子どもも大人も、「今、これでいい。」と思っている時は変わりません。子どもなりに「自分は身体が弱いので、何とかしなくちゃ！」と思っていたから、変わったのでしょうか。

後藤補註：

一九八〇年当時の命理・遁甲による個人の造命開運法が確立・高度化されてゆく過程にあったため、命理・奇門遁甲の実践・漢方処方・食養生と並行してモンテッソーリの幼児教育にも取り組まれています。「言うは易く、行うは難し」、「知行合一」|| 「行動を伴わない知識は無知に同じ」などと言われますが、僅か五才の幼小児期から実に二十年以上の長きにわたり、我が息子の造命開運・立命のため、命理・遁甲の活用、漢方・食養生などを実行実践し続けたのです。本稿の冒頭に掲げた疑問に対する貴重な臨床試験的実証的な命理・遁甲活用の事例であります。命理・遁甲活用の効果を深くご理會いただけたものと確信いたします。

(令和二年〔二〇二〇年〕一月十七日作成)